

レーニン選集

8

マルクス=レーニン主義研究所記

РАБОЧИЙ И СОЛДАТЪ

РАБОЧИМЪ, СОЛДАТАМЪ И КРЕСТЬЯНАМЪ!

Известия Центрального Совета Рабочих и Солдатских Депутатов. На съезде представителей и делегатов Центрального Совета Рабочих и Солдатских Депутатов. В. И. Ленин. Доклад о работе Центрального Совета Рабочих и Солдатских Депутатов. Доклад о работе Центрального Совета Рабочих и Солдатских Депутатов. Доклад о работе Центрального Совета Рабочих и Солдатских Депутатов.

ИЗВѢСТІЯ ЦЕНТРАЛЬНОГО ИСПОЛНИТЕЛЬНОГО КОМИТЕТА И ПЕТРОГРАДСКАГО СОВѢТА РАБОЧИХЪ И СОЛДАТСКИХЪ ДЕПУТАТОВЪ.

Декретъ о мирѣ, принятый единогласно на засѣданіи Все- російскаго Съѣзда Советовъ Рабочихъ, Солдатскихъ и Крестьянскихъ Депутатовъ 26 октября 1917 г.

ИЗВѢСТІЯ ЦЕНТРАЛЬНОГО ИСПОЛНИТЕЛЬНОГО КОМИТЕТА И ПЕТРОГРАДСКАГО СОВѢТА РАБОЧИХЪ И СОЛДАТСКИХЪ ДЕПУТАТОВЪ.

Декретъ о землѣ

レーニン選集 第8冊 ¥250.

1958年1月10日 発行

訳者 マルクス・レーニン主義研究所
レーニン全集刊行委員会

発行所 株式会社 大月書店
東京都文京区本郷1の15
電話 (92) 3091・7887
振替 東京 16387

三晃印刷・田中製本

はしがき

一 この選集は、ソ同盟マルクスレーニン主義研究所編『レーニン二卷選集』をもとにし、同研究所と日本のマルクスレーニン主義研究所との意見でいくつかの論文を加除して編集したものである。

一 翻訳には現行版としてもっとも權威のある『レーニン全集』第四版を底本につかった。全集のどこに入っているかは各論文末にしめしてある。

一 原注は(1)(2)……でしめして各段落のつぎに、訳注は*印をつけて人名注とともに巻末にかかげておいた。ただし人名注は、本文のなかではいちいち印をつけずに、一括してアイウエオ順に配列してある。なお、本文中「」内の六号または六ポイント組の挿入は訳者による補注である。

一 訳文のなかで傍点がついている箇所は原文ではイタリック体になっている。ゴシック体のところは原文では同様ゴシック体である。

一 訳出には全集刊行委員会の訳者団と校閲者団が責任をもつてあたり、術語・用語・文体・字づかいの統一をおこなっている。

目 次

国家と革命 マルクス主義の国家学説と革命におけるプロレタリアートの諸任務

第一版序文……………七

第二版序文……………八

第一章 階級社会と国家……………九

一 階級対立の非和解性の産物としての国家……………九

二 武装した人間の特殊な部隊、監獄その他……………二二

三 被抑圧階級を搾取する道具としての国家……………二四

四 国家の「死滅」と暴力革命……………二七

第二章 国家と革命。一八四八—一八五一年の経験……………二三

一 革命の前夜……………二三

二 革命の総括……………二七

三 一八五二年におけるマルクスの問題提起……………三三

第三章 国家と革命。一八七一年のバリ・コンミュニンの経験。マルクスの分析……………三四

一 コンミュニン戦士の試みの英雄精神はどういう点にあるか？……………三四

二 粉碎された国家機構をなにに代えるか？……………三八

三	議會制度の廃棄	四三
四	国民の統一を組織すること	四七
五	寄生体としての国家の廃絶	五〇
第四章	つづき。エンゲルスの補足的な説明	五三

一	『住宅問題』	五三
二	無政府主義者との論戦	五四
三	ベーベルあての手紙	五八
四	エルフルト綱領草案の批判	六一
五	マルクスの『フランスにおける内乱』の一八九一年の序文	六七
六	民主主義の克服についてのエンゲルスの見解	七二

第五章	国家死滅の経済的基礎	七四
-----	------------	----

一	マルクスの問題提起	七五
二	資本主義から共産主義への移行	七七
三	共産主義社会の第一段階	八二
四	共産主義社会の高い段階	八五

第六章	日和見主義者によるマルクス主義の卑俗化	九一
一	ブレハーノフと無政府主義者との論戦	九二
二	カウツキーと日和見主義者との論戦	九三
三	カウツキーとパンネツクとの論戦	九九

労働者・兵士代表ソヴェト第二回全ロシア大会

一九一七年十月二十五—二十六日（十一月七—八日）

一 労働者、兵士、農民諸君へ！……………一〇六

二 講和にかんする報告 十月二十六日（十一月八日）……………一〇九

三 講和にかんする報告についての結語 十月二十六日（十一月八日）……………一二四

四 土地にかんする報告 十月二十六日（十一月八日）……………一二七

労働者統制令草案……………一二三

ロシア社会民主労働党（ボリシエヴィキ）中央委員会から

全党員およびロシアの全労働者諸階級に……………一二五

労働者と勤労被搾取農民の同盟 『ブラウダ』編集局への手紙……………一二八

憲法制定議会にかんするテーゼ……………一三一

銀行国有の実施とこれに関連する必要な措置についての布

告草案……………一三五

どのように競争を組織すべきか？……………一三八

勤労被搾取人民の権利の宣言……………一四七

不幸な講和の問題の歴史によせて

併合主義的单独講和の即時締結の問題についてのテーゼ……………一四九

統一の叫びにかくれた統一の破壊について

一 「分派状態」について……………一五七

二 分裂について……………一六三

三 八月ブロックの分解について……………一六六

四 「七人組」にたいする調停派の忠告……………一六九

五 トロツキーの解党主義的見解……………一七二

事項注……………一七九

人名注……………一八七

解説……………一九五

国家と革命

マルクス主義の国家学説と革命に
おけるプロレタリアートの諸任務

第一版序文

国家の問題は、現在、理論的な面でも、実践的「政治的な面でも、特別の重要性をもつようになってきている。帝国主義戦争は、独占資本主義の国家独占資本主義への転化過程を極度にはやめ、激化させた。全能の資本家団体とますますかたく融合している国家による勤労大衆の法外な抑圧は、ますます法外なものになっている。先進諸国——これらの国の「銃後」のことだが——は、労働者にとって軍事監獄に転化しつつある。

長びいている戦争の前代未聞の惨事と惨禍は、大衆の状態をたえられないものにし、彼らの憤激をつよめている。国際プロレタリア革命は、あきらかに成長している。この革命の国家にたいする関係の問題は、実践的な重要

性をもつようになってきている。

比較的平穩に発展した数十年間に蓄積された日和見主義の諸要素は、全世界の公認の社会主義政党を支配する社会排外主義の潮流をつくりだした。この潮流（ロシアではブレハーノフ、ポトレソフ、ブレスコフスカヤ、ルバノヴィッチ、それからまたすこしばかり隠蔽された形ではツエレトリ、チエルノフ氏らの一派、ドイツではシャイデマン、レギーン、ダヴィッドその他、フランスとベルギーではルノーデル、ゲード、ヴァンデルヴェルデ、イギリスではハインドマン、フェビアン派等々）——口先では社会主義、行動では排外主義——の特徴は、「社会主義の指導者」が、「自分の」国のブルジョアジーの利益だけでなく、はかならぬ「自分の」国家の利益に、卑しい従僕的な仕方で順応しているということにある、——なぜなら、いわゆる大国の大多数は、はやくから、幾多の弱小民族を搾取し隷属させているからである。ところで、帝国主義戦争は、まさに、こういう獲物の分配と再分配のための戦争である。一般にブルジョアジーの影響から、とくに帝国主義ブルジョアジーの影響から、勤労大衆を解放するための闘争は、「国家」についての日和見主義的偏見と闘争することなしには不可能である。われわれは、はじめに、マルクスとエンゲルスの国家

学説を考察し、この学説のわすれさられたか、日和見主義的歪曲をこうむっている面を、とくにくわしく論じる。

つぎに、この歪曲の主要な代表者であるカール・カウツキー、現在の戦争中にきわめてみじめな破産をとげた第二インタナショナル（一八八九—一九一四年）のもっとも有名な首領であるカウツキーをとくに究明しよう。最後に、一九〇五年の、またとくに一九一七年のロシア革命の経験から主要な結論をひきだそう。一九一七年の革命は、見たところ、現在（一九一七年の八月初め）その発展の最初の段階をおえようとしているが、この革命全体は、総じて、帝国主義戦争によってひきおこされたプロレタリア社会主義革命の鎖の一環としてはじめて理解されるものである。プロレタリアートの社会主義革命の国家にたいする関係の問題は、こうして、実践的・政治的な重要性をもつようになってきているだけでなく、近い将来資本の束縛から自分を解放するためになすべきことを大衆に解明する問題としても、このうえなく切実な重要性をもつようになってきているのである。

一九一七年八月

著者

第二版序文

この第二版は、ほとんど変更をくわえずに印刷される。つけくわえられたのは、第二章第三節にすぎない。

著者

モスクワ

一九一八年十二月十七日

第一章 階級社会と国家

一 階級対立の非和解性の産物としての国家

いまマルクスの学説は、解放闘争を行つてゐる被抑圧階級の革命的思想家や指導者の学説が、歴史上再三出たのとおなじ目にあつてゐる。大革命家の生前には、抑圧階級はたえない迫害を彼らにむくい、野蠻このうえない敵意、狂暴あくなき憎惡、うそと中傷の乱暴きわかる攻撃でその学説をむかへた。彼らの死後には、革命的学説の内容を去勢し、その革命的な切っ先をにぶらせ、それを卑俗化するとともに、被抑圧階級を「慰め」、瞞着するために、彼らを害のない聖像にかえ、彼らをいわば聖列にくわえ、彼らの名まえにある榮譽をあたえようとする企てがなされる。マルクス主義をこのように「仕上げる」点で、いま、ブルジョアジーと労働運動内の日和見主義者とは共同一致してゐる。彼らは学説の革命的側面、その革命的な精神をわすれ、排除し、歪曲してゐる。そして、ブルジョアジーにうけいれられるもの、あるいはうけいれられるように見えるものを、前面にお

しだし、礼讃してゐる。いまでは、社会排外主義者はみな「マルクス主義者」である——冗談じゃない！——そしてきのうまではマルクス主義撲滅の専門家であつたドイツのブルジョア学者たちは、略奪戦争を行うのにこうもみごとに組織された労働組合をそだてあげたという、「ドイツ民族的な」マルクスを口にすることがますます頻繁になつてゐる。

事態がこのようであり、マルクス主義の歪曲が未曾有にひろがつてゐるので、われわれの任務はなによりもまず、マルクスの眞の国家学説を原状に復すことである。このためには、マルクス、エンゲルス自身の著作から、幾多の長い引用をする必要がある。もちろん、長い引用文は、叙述をおもくしくするであらうし、平易にするたしにはすこしもならないであらう。だが、引用文なしですませることはまったく不可能である。読者が、科学的社会主義の創始者たちの見解全体と、この見解の發展とについて独自の意見をもてるようになるためには、また、今日支配的な「カウツキー主義」がこの見解を歪曲してゐることを文獻的に立証して、明瞭に指摘するためには、マルクス、エンゲルスの著作から、国家の問題について述べた箇所をみな、すくなくとも決定的な箇所はみな、できるだけ完全な姿で、かならず引用しなければ

ならない。

もつとも普及しているフリードリヒ・エンゲルスの著作『家族、私有財産および国家の起源』からはじめよう。この著書は、一八九四年にシュトゥットガルトですでに第六版が出ている。われわれはドイツ語の原書の引用を訳出しなければならない。なぜなら、ロシア語訳は、おびただしく出ているにもかかわらず、多くは不完全なものであるか、きわめて不出来なものだからである。

エンゲルスは、彼の歴史的分析を総括してこう述べている、「国家はけつして外から社会におしつけられた権力ではない。またそれは、ヘーゲルの主張するような、『人倫的理念が現実化したもの』、『理性が形象化し、現実化したもの』でもない。それは、むしろ一定の発展段階における社会の産物である。それは、この社会が自分自身との解決できない矛盾にまきこまれ、自分でははらいのける力のない、和解できない対立物に分裂したことを告白するものである。ところで、これらの対立物が、すなわちあい争う経済的利害をもつ諸階級が無益な闘争のうちに自分自身と社会をほろぼさないためには、外見的には社会のうえに立つてこの衝突を緩和し、それを『秩序』のわく内にたもつべき権力が必要となった。そして、社会から生まれながら

社会のうえに立ち、社会にたいしてますます外的なものとなっていくこの権力が、国家である。」（ドイツ語第六版、一七七―八ページ）
【六月版マルクス・エンゲルス二巻選集（新書版）第七冊、二六四頁】

ここには、国家の歴史的役割とその意義の問題についてのマルクス主義の基本思想が、まったく明瞭に言いあらわされている。国家は、階級対立の非和解性の産物であり、その現れである。国家は階級対立が客観的に和解させることができないところに、またそのときに、その限りで、発生する。逆にまた、国家の存在は、階級対立が和解できないものであることを証明している。

ほかならぬこのもつとも重要な根本的な点について、マルクス主義の歪曲がはじまる。それは二つの主要な方向をとっている。

一方では、ブルジョア・イデオローク【思想的、とくに小ブルジョア・イデオロークは、――議論の余地のない歴史的事実】にせまられて、国家は階級対立と階級闘争のあるところにか存在しないことを、承認せざるをえないが、――国家は諸階級を和解させる機関であるといったふうにマルクスを「少々修正」する。マルクスによれば、諸階級を和解させることができるようなら、国家は発生することも存続することもできないはずである。と

ころが、小市民的で俗物的な教授や政論家たちによると、——たえず、マルクスをご親切にも引合いにだしてはいるが！——国家はまさに諸階級を和解させるということになる。マルクスによれば、国家は階級支配の機関であり、一階級が他の階級を抑圧する機関であり、階級の衝突を緩和させながら、この抑圧を法律化し強固なものにする「秩序」を創出することである。小ブルジョア政治家の意見によれば、秩序とはほかならぬ階級の和解であって、一階級が他の階級を抑圧することではなく、また衝突を緩和させることは和解させることであって、抑圧者をうちたおすための一定の闘争手段と闘争方法とを被抑圧階級からうばいとはならないのである。

たとえば、一九一七年の革命で、国家の意義と役割の問題が全貌をあらわすと、すなわち、それが即時の行動、しかも大衆的な規模での行動の問題として実践的に現れると、エス・エル（社会革命党）とメンシェヴィキはみな、「国家」は階級を「和解」させるという小ブルジョア理論へ、たちまち完全に転落してしまつた。これら両党の政治家の無数の決議や論文には、この小市民的・俗物的な「和解」論が骨の髄までしみこんでいる。国家は、自分の対立者（自分に対立する階級）と和解できない、一定の階級の支配の機関である、——このことが小ブルジ

ョア民主主義派にはどうしても理解できないのである。国家にたいする態度は、わが国のエス・エルやメンシェヴィキが、けつして社会主義者ではなく（われわれボリシェヴィキはこのことをつねに証明してきた）社会主義まがいの美辞麗句をならべたてる小ブルジョア民主主義者であるという事実の、もっとも明瞭な現れの一つである。

他方では、マルクス主義の「カウツキー主義的」歪曲は、はるかに巧妙である。国家が階級支配の機関であることも、階級対立が和解できないことも、「理論的」には否定されていない。しかし、つぎの点がわすれられるか、もみけされている。すなわち、もし国家が階級対立の非和解性の産物であるなら、また国家が社会のうえに立ち、「社会にたいしてますます外的なものになっていく」権力であるなら、あきらかに、被抑圧階級の解放は、暴力革命なしには不可能なばかりでなく、さらに、支配階級によってつくりだされ、この「疎外」を体現している国家権力機関を破壊することなしには不可能であるといふことが、それである。理論的には自明なこの結論を、マルクスは——あとで見ると——革命の諸任務の具体的・歴史的な分析にもとづいてきわめて明確にひきだしている。ところが、ほかならぬこの結論を、カウツキ

「は「わすれ」、歪曲している、——われわれは、このことを以下の叙述でくわしくしめそう。

二 武装した人間の特殊な部隊、監獄その他

エンゲルスは、こうつづけている、……「古いゲルス」(氏族または克蘭)「組織にくらべてみた国家の特徴は、第一に、国民を地域によって区分することである。」……

この区分は、「自然なこと」のようにおもわれるけれども、それには、血族または氏族別の旧組織との長い闘争が必要であった。

……「第二の特徴は、自身を武装力として組織する住民とはもはや直接には一致しない、一つの公的暴力を創設することである。このような特殊な公的暴力が必要なのは、階級に分裂して以来、住民の自主的に行動する武装組織が不可能になったからである。……こういう公的暴力はどの国家にもある。それは武装した人間からなっているばかりでなく、さらに氏族社会」(克蘭社会)「のまったく知らなかった物的な付属物、すなわち監獄やあらゆる強制施設からなっている」。

……【第七冊、二六四、二六五ページ】

エンゲルスは、国家と呼ばれる「権力」、すなわち、社会から生まれながら、社会のうえに立ち、社会にたいしてますます外的なものとなっていく権力の概念を展開している。この権力は、主としてなんにあるのか？ それは、監獄等を自由に使うことのできる武装した人間の特殊な部隊にある。

われわれは武装した人間の特殊な部隊と言ってよいとおもう。なぜなら、あらゆる国家に特有な公的暴力は、武装した住民や住民の「自主的に行動する武装組織」とは「直接には一致しない」ものだからである。

すべての偉大な革命的思想家と同じように、エンゲルスは、世間一般の俗物根性には、なにも注意するにあらない、もつともありきたりのものと思われているもの、確固不動なばかりでなく、いわば石化した偏見によって神聖視されているもの、ほかならぬこうしたものに自覚した労働者の注意をむけている。常備軍と警察とは、国家権力の暴力行使の主要な道具である。だが——はたしてそれ以外のものでありうるだろうか？

エンゲルスが話しかけている十九世紀末のヨーロッパ人——大革命を体験したこともなければ、またこれを身近かに見たこともなかったヨーロッパ人の大多数の見地からすれば、それ以外のものではあるはずがなかった。

彼らには、「住民の自主的に行動する武装組織」がどんなものか、まったく理解できない。社会のうえに立たされ、社会にたいして外的なものとなっていく武装した人間の特種な部隊（警察、常備軍）の必要が、どうして現れたのかという質問にたいしては、西ヨーロッパやロシアの俗物は、スペインやミハイロフスキーから二、三の文句をかりてきて、社会生活の複雑化とか、機能の分化などを引合いにだしてこたえたがる。

こうした引証は、「科学的」に見える。そして、和解しがたく敵対する階級へ社会が分裂したという、主要で基本的なことをぼかすことによって、俗物をみごとにねむらせる。

この分裂がなかったなら、「住民の自主的に行動する武装組織」は、棒をにぎった猿の群や、原始人や、あるいは氏族社会に統一された人間やの原始的な組織とは、その複雑さや、その技術の高さや、その他の点でちがうではあろうが、しかし、そういう組織はありうるであらう。

そういう組織がありえないのは、文明社会が、敵対する階級に、しかも和解しがたく敵対する階級に分裂している、これらの階級の「自主的に行動する」武装があるなら、これらの階級間の武装闘争をもたらしたはずだか

らである。国家が形成され、特殊な力、武装した人間の特種な部隊が創出される。そして、どの革命も、国家機関を破壊することによって、われわれにつぎのことを如実にしめしている、——すなわち、支配階級は、**自分**に奉仕する武装した人間の特種な部隊を復活させることにどんなに努力するものであるか、被抑圧階級は、搾取者ではなく、被搾取者に奉仕しうるこの種の新しい組織をつくりだすことにどんなに努力するものであるか、を如実にしめしているのである。

エンゲルスは、前掲の考察のなかで、あらゆる大革命が、われわれのまえに、実践的に、明瞭に、しかも大衆行動の規模で提起するまさにその問題、すなわち、武装した人間の「特殊な」部隊と、「住民の自主的に行動する武装組織」との相互関係の問題を、理論的に提起している。われわれは、この問題がヨーロッパとロシアの革命の経験によってどのように具体的に例証されているかを、あとで見よう。

しかし、エンゲルスの叙述にかえろう。

彼は、ときとすると、たとえば、北アメリカのここかしこでは、この公的暴力は徹々たるものであるが（ここで問題になっているのは、資本主義社会としてはまれな例外であり、自由な植民者が優勢であった、帝国主義前

の時代の北アメリカの諸地方である)、一般的には、それが強化していることを指摘している。

……「国家の内部の階級対立がはげしくなるにつれ、また境を接する諸国家が大きくなり人口がふえるにつれて、公的暴力は強化する——まあ今日のわがヨーロッパを見るがよい。そこでは、階級闘争と侵略競争とが公権力を増大させて、いまにも全社会と国家そのものとをのみこむばかりの極点にそれを到達させている」。……【第七編、二】
【大六ページ】

これが書かれたのは、おそらく前世紀の九〇年代の初めである。エンゲルスの最後の序文は、一八九一年の六月十六日づけになっている。当時帝国主義への転換は、——トラストの完全な支配という意味でも、巨大銀行の無制限の権力という意味でも、遠大な植民地政策等々という意味でも——フランスでは、ようやくはじまったばかりであり、北アメリカやドイツでは、なおいつそう微々たるものであった。そのとき以来、「侵略競争」は一大前進をとげた。二十世紀の一〇年代の初めに、地球がこれらの「競争する侵略者」すなわち大きな強盗国家のあいだに、最終的に分割されてしまったので、ますますそうである。そのとき以来、陸海軍備は、信じられないほど増大した。そして、イギリスが世界を支配するか、

ドイツが世界を支配するかをめぐり、獲物の分配をめぐっておこった一九一四—一九一七年の略奪戦争は、盗賊的国家権力が社会の全勢力を「のみこむ」過程を、完全な破局の生じる点に近づけたのである。

エンゲルスは、はやくも一八九一年に、「侵略競争」を、大國の対外政策のきわめて重要な特徴の一つとして指摘することができた。ところが、まさにこの競争が何倍も激化して帝国主義戦争を生みだした一九一四—一九一七年に、社会排外主義の悪党どもは、「自國の」ブルジョアジーの強盜的利益の擁護を、「祖国擁護」とか、「共和制と革命の防衛」とかいった空文句でおおいかくしているのだ！

三 被抑圧階級を搾取する道具としての国家

社会のうえに立つ特殊な公的暴力を維持するためには、租税と国債が必要である。

エンゲルスはこう書いている。「官吏は、社会の機関でありながら、公的暴力と徴税権とをにぎって社会のうえに立っている。氏族」(クラン)「社会の諸機関にはらわれていた自由な、自発的な尊敬では、たとえ彼らがそういう尊敬をえられるにしても、この官吏に

は十分でない」。……官吏の神聖不可侵性についての特別な法律がつくられる。「もつともみすばらしい警察吏さえ」クランの代表者より大きな「権威」をもっている。だが文明国家の將軍でさえ、社会の「自発的な尊敬」をうけているクランの首長をうらやんでよい

〔第七冊、二六〕
〔六―七―二六〕

國家權力機關としての官吏の特権的地位の問題が、ここで提起されている。なにが官吏を社会のうゑに立たせるのかということが、根本的な問題として指摘されている。この理論上の問題が、一八七一年にはパリ・コミューンによって、実践的に解決されたこと、また一九一二年にはカウツキーによって反動的にもみけされたことを、われわれは見るであらう。

……「國家は階級対立を抑制しておく必要から生じたものであるから、だが同時にこれらの階級の衝突のただなかから生じたものであるから、それは、普通、もつとも勢力のある、経済的に支配する階級の國家である。この階級は國家を手段として政治的にも支配する階級となり、こうして、被抑圧階級を抑圧し搾取する新しい手段を獲得する」。……古代國家と封建國家が奴隸と農奴の搾取機關であつただけでなく、「近代の代議制國家は、資本が賃労働を搾取する道具である。

しかし、例外として、あいたたかう諸階級がほとんどの力の均衡をたもっているため、國家權力が、見かけのうゑの調停者として、一時両者にたいしてある程度独自性を得る時期がある」。……十七世紀と十八世紀の絶対君主制、フランスの第一および第二帝制^{*}のボナパルティズム、ドイツのビスマルクがそうである〔第七冊、一八六〕。

われわれのほうでつづくわえるが、革命的プロレタリアートの迫害にうつつたのちの共和制ロシアのケレンスキー政府、すなわちソヴェトは、小ブルジョア民主主義者が指導していたためにすでに無力であつたが、ブルジョアジーは、まだソヴェトを直接に解散させることができるほどつよくはなかつた時期のケレンスキー政府がそうである。

エンゲルスはこうつづけている。民主的共和制では、「富はその權力を間接に、しかしそうであるだけについて、第二には、間接に「政府と取引所の同盟」(フランスとアメリカのばあい)によって行使する」〔第七冊、二六八―二六九〕。

今日では、帝國主義と銀行の支配とは、どんな民主的